

お試し版スパンキング小説「お仕置きレター」

お試し版『お仕置きレター』

お泊り1日目・前編

今年の夏休み、みのるは生まれて初めてひとり、電車で叔母の家へ向かった。何本もの電車を乗り継ぎ、予定時刻より数時間遅れでようやく幸恵の家に・・

「みのるちゃんっ！遅かったじゃないのお～叔母ちゃん、とっても心配したんだからあ」

幸恵は器量こそ、そこそこの美形だったが婚期を逃し36歳になった今も未だ一人身で年に一度、みのるが遊びに来るのを首を長くしながら待っていた・・母親（妹）譲りのみのるが何処と無く自分とも似ていたせいか？お泊り中はどんな我儘も受け入れていた・・

あのねえ～、僕・・来年4年生だよお～！ママが悪いんだよ、友達はみんな携帯電話を持ってるのに、僕にだけ買ってくれないから。ほらあ、遅れる時だって、叔母ちゃんの所へ連絡できるじゃん！僕・・携帯欲しいなあ～

「そうだよね・・良いわっ！私の名義でひとつ買ってあげるっ、その代わり・・お泊り中は私の事をママだと思ってくれる？」

いいよっ！でも・・ママに叱られないかなあ？

「大丈夫よ、私がママに電話で承知させるからあそれなら、良いでしょ？そんな事よりお腹空いたんじゃないなあ～い？スイカをいっぱい買っといたのよ、冷蔵庫でキンキンに冷やしてあるからね♪」

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

みのるはよっぽどお腹が空いていたのか？
幸恵から出されたスイカ、丸々一個分を
ペロリとたいらげてしまった・・・しかも
塩を掛けすぎたのか？お腹が破裂するのかと
思うくらいにジュースを喉へ流し込んだ・・・

『ふわあ～、もう駄目・・・食べられない・・・』

<長旅の疲れもあって稔は晩御飯も食べずに
スヤスヤと深い眠りに落ちた・・・>

「ああ～あ・・・何時の間にか寝ちゃったのね・・・
パジャマも着ないで・・・仕方ない子お～、この
ままっていう訳にもねえ？私が着せてあげるかあ」

<幸恵はみのるを自分のベットへ横たわせると
とりあえず、スッポンポンにして彼が持って
来た、リュックからパジャマを取り出し着替えを
始めた・・・リュックの奥でなにやら手紙らしき
物を見つけたが、彼に無断で見るのも悪いと思い
そのままにして、携帯の件で妹へ電話をする事に>

『ああ、美智子・・・うん・・・無事に着いたわよ。
それから・・・今時、携帯くらい買ってやんなさい
うん、私が払うわよっ！そう・・・それで良いわね？』

<妹にみのるの携帯の件を了承させた幸恵は
再び彼のリュックの中にあつた手紙を取り出した。
妹からの手紙に書かれてあつた内容とは・・・>

「何なにい～？・・・へえ～みのるのオネシヨ？
やだっ！まだ、直ってないんだあ～？うふふ・・・
可愛いもんじゃないのお～、オネシヨくらい。
はあ？お仕置きのやり方あ？なんなの・・・それ？

お試し版スパンキング小説「お仕置きレター」
普通、お仕置きといえば・・・お尻ペンペンとかで
ふむ・・・ふむ・・・ナルホドね・・・彼の為って訳ね。
でも、そうなる。。明日の朝は鉄板ね！」

翌朝・・・

「みのるちゃ～ん、朝ですよっほら、起きてえ」
うう～ん・・・寝ちゃったんだあ・・・僕・・・

「そうよお～、幸恵叔母ちゃんが
パジャマに着替えさせてあげたのよお～、
みのるのおちんちん・・・バッチリ、
見ちゃったからねえ～！うふっ・・・」

あのさ・・・そのリュックから・・・出したの？

「そうさあ～、叔母ちゃんのお家に男の子用の
寝巻きやパジャマなんてある訳ないでしょ～？」

他になんか、見なかったあ？

「ああ！あれね・・・でも大丈夫でしょ？
あれって、稔がオネショをしなければ済むんだし・・・
もし？仮にみのるがオネショをしたとしても。
そうね・・・せいぜい、お尻ペンペンのお仕置き・・・
って・・・まさか・・・しちゃったのお？
ちょっと、叔母ちゃんにおちんちん見せてご覧っ」

うわあ！勝手に見ないでえ～っ！嫌あ～あああ

「あらまあ・・・やっちゃったんだあ・・・ふう～
でも、しょうがないかあ・・・昨日はスイカを
あんなに食べさせたのは私だもんね・・・でも」

お試し版スパンキング小説「お仕置きレター」

でも・・・なあに？叔母ちゃんはしないよね・・・
お仕置きとか・・・ママじゃないもんね・・・

「そうは、行かないわよお～、お泊り中は
私の事をママだと思いなさいってお約束、した
もんねえ～？携帯電話・・・欲しくないのかなあ？」

うわあ～んっ！叔母ちゃんの意地悪う～！

「ほらあ、泣かないの・・・心配しなくても・・・
お尻ペンペンのお仕置きだけで許してあげる
さあ・・・良い子でお膝に乗れるかなあ～♪」

う・・・うん・・・ちょっとだけ・・・だよ・・・
僕。。お尻ペンペン嫌いなもの・・・だから・・・

お泊り1日目・・・後編へ続く

お泊り1日目・後編
みのるちゃ～ん？叔母ちゃんだって
大好きな、みのるのお尻へお仕置きなんて
ほんとはしたくなんてないのよ。だけど・・・
ママから叔母さんに・・・って渡されたお手紙を
なんで直ぐに見せなかったのかなあ～？

だってえ～・・・

「だってえ～、じゃあないでしょ？メッ！
とにかく、今すぐお尻ペンペンですよっ
そうしないと、叔母ちゃん・・・この
おしっこで、濡れたお布団も干せないわ。
はい・・・ここよ、いつまでも濡れた
パジャマをはいてるのも嫌でしょ～にい」

お試し版 spanking 小説「お仕置きレター」

わ・・わかった・・でも少しだけだよ。

「はい、はい、ペンペンは少しね・・」

(100回って少し、なのかしらあ？
二日続けての時はお灸もするのよね？)

<みのるは叔母の意味深な言葉に少し
不安を残しながらも、叔母の太股
あたりにお尻をちょこんと乗せた>

「あらあら・・こんなに濡れちゃってえ
気持ちが悪いでしょ～？今、叔母ちゃんが
脱がせてあげるからねえ～、お尻出そうね」

<叔母の、その優しい手付きはとても今から
お尻叩きをする雰囲気では無かったみのるは
普段、ママにお尻叩きのお仕置きをされる時は、
ほぼ不意打ちに近い状況でいきなり小脇へ
抱えられたり、問答無用でズボンとパンツを
脱がされるのが常だった>

わあ～んっ、お尻ペンペン怖いよお～んっ

「ほお～らああ、可愛いお尻が出たわよお～
叔母ちゃんにごめんなさいと言えるかなあ？」

言えるう～！ごめんなさあ～いつ！！

「良い子ね・・さあ、お尻ペンペンよっ・・
ペチンッ、悪いお尻はペンペンだもんねえ♪」

あんっ、お尻・・い（わああいつ！痛くない！）

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

「はい。今度はこっちのお尻をペチンよお〜♪」

<幸恵のお尻叩きは音だけは大きかったが
さほど痛みも無く彼にとってこのお仕置きは
逆に大好きな幸恵叔母ちゃんの優しいお膝に
公認で甘えられる時間とも思っていた・・・>

「うう〜ん・・・もう少しペンペンかなあ？
どう？いつもママはもっと痛いペンペンする？」

わあ〜んっ！いつもと同じくらい痛いよお〜ん！

「そ・・・そうなの！？ごめんね・・・
叔母ちゃん、知らなくて・・・だけど
お手紙には100回お尻ペンペンって
書いてあったから、もう少しだけ
我慢しようねえ〜♪その代わり残りの
数は少し優しいお尻ペンペンにしてあげる」

ばちん、ぺちん、ばちん、ばちん・・・
今度は左ね・・・いくわよ・・・ばちんっ
ペチン、みいるちゃんは良い子ねえ〜・・・

ああ〜ん、お尻いたあ〜いつ！うわあ〜ん

バチ、ペチン・・・「お尻痛いねえ〜？」
「もう少しの辛抱よお」・・・ペチン、ばちん

(全然痛くないもんねえ〜・・・だあ！)

悪い子ちゃん・・・ペチン、ペチン・・・
ペンペンされてるときは・・・ペチン
「ごめんなさい・・・でしょお〜？」

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

ぺちん、ぺちん、ぺちん・・・

<その後も幸恵は、きっちり100回のお尻叩きを済ませたものの、それはまるで稔のお尻へ止まった蚊でも追い払う程度の強さだった>

「はあ～い♪これで100回よお～、良い子でお尻ペンペンのお仕置きを我慢出来たわねえ～これから、お布団を干してえ～、みのるちゃんのおちんちんとお尻の穴とかも、綺麗に洗ってあげるからね～、だから、それまで良い子でそこに立っち、して、待ってられるかなあ？」

ふええ～ん、待ってる・・・待ってるから今夜も僕と、一緒に寝んねしてくれる～？

「もちろんっ！それに・・・良い子でお仕置きを受けれたご褒美に後で叔母さんの取っておきのエステ用のオイルで稔の真っ赤になったお尻を撫で撫でて介抱してあげますからねえ～♪」

それって・・・オリーブオイル？のこと・・・？

<稔はお風呂場でおちんちんを幸恵から丹念に洗って貰うと、綺麗に始末されたベットの上でうつ伏せにされ、生まれて初めて自分尻たぶへオイルとやらを塗られそれは、天にも昇るような快感だった>

あんっ・・・お、叔母ちゃん気持ち良いよお～

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

「やあ～ねえ～、女の子みたいな声を出してえ
それなら・・・こっちの方はどうかしらあ～ん♪
もっと、もっと気持ちが良いわよお～ん・・・」

はふう・・・あう・・・ああ・・・あっ・・・

「うふ・・・お尻の赤みが引くまでずう～っと
こうやって・・・こうしててあげるからねえ～」

この時彼は気が遠くなる様な快感に明日も
絶対にオネショをしようと心に誓った・・・

お泊り二日目へと続く

お泊り2日目・前編

叔母、幸恵の家へ遊びに来て二日目。
稔がまだ赤ちゃんの頃、オムツをママから
替えて貰った時以来の快樂を堪能し
その気持ち良さからか？ワザとパンツへ
オネショをしようと朝方、幸恵のま横で
力いっぱい下半身を”りきませて”いた。

あっ・・・

「あれえ？もう、みのるちゃんは
目が覚めたのお？おはようさあ～ん
どれどれ、今日はちっちゃしてないかなあ？」

<幸恵はおもむろに稔のパジャマのズボンの

お試し版スパンキング小説「お仕置きレター」
中へ手を伸ばした・・そして、中を探ると>

「わっ！みのるちゃんっ、今朝はうんちもなの？」

違うのっ！ちがうのこれはねえ～っ

「シィ～・・良いのよ・・おばちゃん。
ちゃ～んと、お手紙読んでるからねえ～♪
もし？二日続けてみのるちゃんがおねしょ・・
あっ、うんちもだったわね・・。粗相したら
どうい、お仕置きをすれば良いかもね♪」

ええ！そうなの？ペンペンして・・それから

「ううん、連続の粗相はちょっと違う見たいよお
とりあえずう、お風呂で小股を綺麗にしようかあ」

う・・うん。

<稔は粗相したパジャマのまま幸恵にお風呂場まで
連れて来られると、再び頭が真っ白になる様な叔母
の優しい手でちんちんとお尻を洗って貰った。
そこまでは昨日のパターンだったが・・>

幸恵おばさん・・何処行くの・・？
お尻ペンペンはベットだよねえ～？

「今日はちょっと違うんだなあ～、これが・・」
へっ？僕、ペンペンが良いっ！ペンペン～っ

お試し版 spanking 小説「お仕置きレター」

<幸恵は普段あまり使わない納戸でここは
窓もなく、若いみのるにはそこへ連れて来られた
だけで恐怖を感じさせる部屋だった・・>

「さっ、お膝へうつ伏せよ・・先ずはお尻の
穴のチェックからよお〜♪・・お・い・で・」

う・・うん・・でも・・
あっ・・なんか痛いよお〜ん

<幸恵はうつ伏せにした稔のお尻の穴を左手で
大きく広げると、そこへめん棒を差し込んだ>

ペチンっ「お尻・・動かさないのお〜」
ああ〜ん・・痛い・・痛いよお〜！

「まだ・・3本しか入れてないじゃないのお〜
男の子でしょ？さあ・・もっと奥も点検ね・・」

わあ〜ん、抜いてよお〜おおっ

「お尻の中にまだ、うんちが残ってたら
これからする、お灸のお仕置きの時に
また、お漏らししちゃうでしょ〜？」

お灸・・何それ？どんなんか見せて・・

お試し版 spanking 小説「お仕置きレター」

「お灸をしてもしょうがないでしょお～これは、悪い子のお尻へ据える物で・・・食べられないのよはあ～い。今日も良い子で我慢できるかなあ？」

<幸恵は数本のめん棒で稔のお尻の穴を塞ぐとリュックの中へ妹が用意していたお灸を指示通り4つ程、お尻の上へ乗せた・・・そして・・・>

うげえ～っ！あちゆいよお～おおっ！
お灸って熱いお仕置きなのお～おおお！
ごめんなさいっ！ごめんなさいあ～あっ！

「まだ、1個目じゃないのお～、男の子でしょ？」

(お灸ってそんなに熱かったんだあ～・・・
知らなかったわあ～、それにしても妹も私も
お灸なんて、した事ないのに・・・よくこんな
お仕置きを思いつくわよねえ～？あいつ・・・)

うわあ～んっ！あぢい～よお～っ！！
お願い、もう、良い子だからあ～ああっ

「良い子なら、どうして？叔母さんのお仕置き中にうんちを漏らしちゃうのお～？これは・・・いっぺんに残りの3つのお灸へ火をつけなきゃ駄目かしらあ」

ふぎい～いっ！無理だよお～っ
一個でも、熱いのにい～いっ
ああ、あっ・・・あうああ～ああっ！

<幸恵は稔の悲痛な叫びに耳を貸さず淡々と妹からの手紙通りにお仕置きを進めていった>

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

ひい～いいっ！お尻ペンペンにしてえ～っ
あつう～いいっ！うわあ～ん、わあんわ～ん
おねしょはワザとしたんだよお～！お願い

「なあに？今・・・叔母さん・・・
良く聞こえなかったんだけど・・・
今・・・ワザと・・・って言ったあ？」

そう・・・そうなのっ、だ・・・だから・・・
だから、本当のおねしょ、じゃないのお！

<幸恵は彼の告白に頭の中で何かが切れた>

「へえ～・・・叔母さんの布団を・・・ワザと
汚したって言うのね・・・そうだったの・・・
もう一度、私のお目目を見て言えるかしらあ？」

幸恵はそう、稔に言い放つと間もなく燃え
尽きそうなお灸をお尻から取り除くと自分の
膝の上へポンと彼を抱いてじっと目を見つめた

「昨日の10倍のお尻ペンペンが必要ね・・・
でも・・・その前にお腹を綺麗にしとこっかあ？」

ふえ～んっ、ごめんなさあ～いつ
もう、しませんからあ～あああ！

「泣いても、だあ～めっ。さっ・・・さっきの
めん棒を抜くから、そこでお馬さんになりなさい」

ひう・・・ひっ・・・こう？もう、熱いのはやだよ

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

「もっと、お尻を突き出すの。それじゃ～
叔母さんにお尻の穴が見えないでしょお～？
高くお尻を上げたら、お浣腸のお仕置きを
悪い子にお願いしますって、言ってご覧なさい」

お・・・お浣腸って・・・お仕置きなの？

「そうよお～、ちょっとくらい、ぽんぽんが
痛くなくても、うんち出来ないの。判るかな？」

わかんない・・・

「うふふっ、直ぐに判るわよお～、さっ・・・
叔母ちゃんにお仕置きをお願いをなさい」

ぐふっ・・・すごく・・・怖いけど・・・
良い子でお仕置き済んだら・・・またあれで
お尻を撫で撫でしてくれるう～？

ペチンっ「早くお願いしないと・・・また
お尻があっちい～になるわよお～ん」
ああ～んっ！悪い子のお尻に・・・お・・・
お浣腸のお仕置きをお願いしますう～っ

「はああ～い♪良い子ちゃんねえ～、
それじゃお尻の力を抜いてえ～、は・や・く・・・
また、みのる君のお尻をぴしゃんするわよお～」

(お浣腸にお灸かぁ・・・しかし、なんでも
揃えてるもんねえ？この坊やのママはぁ・・・)

お試し版 spanking 小説「お仕置きレター」

お泊り二日目・後編

「はああ〜いい子ちゃんでしゅねえ〜
それじゃ、お尻の力を抜いてごらあ〜ん」

力を抜くってえ・・・どうやんのお〜！

「ここっ、このお尻の穴をすぼめないよお〜に
するの・・・判るう？ほわあ〜って感じかなあ？」

<幸恵は稔のアナルの中心や、その周りへ
人差し指の腹で撫で回したりポンポンした>

(うふっ、ピクピクさせちゃって、可愛い)

「お尻はもっと高くよ、出来るでしょ？おでこは
床にペタンと付けなさい。そうよ〜お、このまま
このまま、どれ？お薬をお尻へ入れる前にゆきえ
叔母ちゃんの指で少しだけ、練習しとこうね」

お、お尻は、もう嫌あ〜あああ・あう・・・

「ほうらあ、良い子にしてなさあ〜い。
叔母さんの指がどんどん入ってくわねえ〜？
そんなに、叔母ちゃんの指が美味しいんだあ？」

(もっと入るかなあ〜？よいしょっと・・・)
ああん、中で動いてるう〜・・・ああ・・・

「これっ、動かさないのお〜、いくらお尻を可愛く
ページ(14)

お試し版 spanking 小説「お仕置きレター」
フリフリしたって、この指は抜いてあげませんっ
ワザとオネショなんかして、ほお〜んと稔君は
悪い子なんだからあ〜、お尻っじっとなさいっ

だ・・だって、お尻の穴が痛いんだもお〜んっ

「みのるちゃんの痛いって言うのは本当に
本当かしらねえ〜？まあ・・後でたっぷり
お浣腸して、確かめてあげるからね・・」

ああ・・お尻・・グリグリしないでえ〜！

「うう〜ん・・だいが柔らかくなったかしら？
そろそろ、いいかなあ？それとも、もう少し
お尻の準備をしておこうかしらあ〜。うん？」

あうあ・・お・・お浣腸してえ〜

「まあ！みのるのママの言う通りね・・
みのるちゃんはお仕置きをすればするだけ
良い子になるんだね？その調子で・・そっ、
お尻をすぼめないのよお〜、良い？」

<幸恵はひと指し指と親指でグイッとみのるの
お尻の穴を広げると、そこへ狙いを定めて、先ず
一個目のイチジク浣腸の先っぽを差し込んだ>

わあ〜んっ、お腹があ〜、冷たいよお〜ん

「お尻、フリフリしないのお〜」パチンッ

ひいああ〜、昨日くらいのペンペンが良い！

お試し版 spanking 小説「おし置きレター」

「ふう～ん・・・昨日のは痛くなかったって事よね？
そうやって、痛くもないのに痛いって言うなら、
本当に辛いおし置きをされてみるちゃんが泣いても
叔母ちゃん・・・おし置きを止めるのよそうっとお。
そう、言ってるうちに、ほら、3個目が入ったわあ
うんちが出ない様に指でしっかり栓、しようねえ♪」

うわあんっ、おへその辺りがグルグルしてきたよお
うんちい～！うんちい～いいっ！出ちゃうよお～ん
「大丈夫よ、ちゃあ～んと指で栓をしてるんだから。
それに、直ぐにうんちしたらおし置きにならないのよ
お腹をこう・・・こうしてグリグリするとお～・・・」

<幸恵はよつんばいの稔の股の間から右手を差込み
その掌で彼のお腹を少し荒っぽく、揉み解した・・・>

うええ～んっ、出る、出る・・・で・・・る・・・
もう、絶対に嘘はつきませんからあ～っ

「ほお～ら、正直になれたあ！おし置きの仕上げは
どうしよっかなあ？ペンペン？それともお灸かなあ？」

ペンペン～、お尻ペンペンで良い子になるう～！

「そうなの？本当にそのおし置きの良いのね？
さっきも言ったけど昨日の10倍は痛いのに？」

お灸よりか、ずっと良いよお～っ、ひい～ん

「判ったわ、そんなら直ぐ、このお膝へいらっしやい。
おトイレでうんちはあ、お尻ペンペンのおし置きが全部
済んだらさせてあげる。最低100叩きだったわね？」

お試し版スパンキング小説「お仕置きレター」

いやぁ～あああ！うんちがさきい～！！

「だぁ～めっ、お尻ペンペンからなのっ」

ばちい～んっ！ばちんっ！ばちん！ばあん！
はうぁ～あああ、出ちゃうう～！！あうぁ～っ

「あれれ？このペンペンも痛くはないんだあ？
それなら、もっと上の方から叩こうかしらね～」

パン！パンッ！パンッ！パン！
パンッ！パン、ばぁ～んっ！！
ばあんっ！ぱん！ぱん！ばあん！
パン！パンッ！パンッ！パン！
パンッ！パン、ばぁ～んっ！！
ばあんっ！ぱん！ぱん！ばあん！
パン！パンッ！パンッ！パン！
パンッ！パン、ばぁ～んっ！！
ばあんっ！ぱん！ぱん！ばあん！

<幸恵は更に腕を大きくそして高く、まるで
半円を描くかの様にしなやかに打ち下ろした。
その、平手打ちはどんどん加速し、すでに彼の
口からは悲鳴も謝罪の言葉も出ない程だった>

あぐう・・・ひう・・・うぐう～ああ・・・あうっ
パン！ばあん！パン！パン！ばあんっ！！

「こんなに痛いお尻ペンペンしてあげてるのに、
ごめんなさいも言えないんだあ？これはどうかなあ？」

ばちい～んんっ！！ひゃあああああ！
(うふふっ・・・さすがにこれは痛かったね)

お試し版パンキング小説「お仕置きレター」

「おトイレを済ませたら、みのるちゃんの
お尻にはさっきの倍くらいの痛さでお尻を
ペンペンしなくちゃいけないわねえ〜♪」

＜あまりお仕置き慣れしていなかった幸恵は稔の
トイレを済ませると、その足で24時間沸き
通しの、常に42度前後に保たれていた自慢の？
湯船に彼を横抱きにして、真っ赤に腫れ上がった
お尻を”じわあ〜と”その湯へと浸してみた＞

うお〜、お尻があちゆいよお〜！！あああ！！

「おかしいわねえ？確か・・・ちょうど良い
湯加減に設定してある筈なのに・・・それに
お灸のお仕置きよりか、ずっ〜と良いでしょ〜♪
さあ、みのるう。もう一度、叔母ちゃんの柔らかい
お膝の上で、う〜んと良い子になろうかあ？」

お仕置きレター 完